

JSI Newsletter

日本免疫学会会報 The Japanese Society for Immunology Newsletter

特集

抑制性T細胞：過去と現在

日本免疫学会会長就任にあたって

高津 聖志 Kiyoshi Takatsu 東京大学医科学研究所

このたび、濱岡利之会長の後任として2003年および2004年の2年間に亘って日本免疫学会の会長をお引き受けすることになり、その重責を痛感致しております。日本免疫学会は、私が大学院3年生のときに発足しましたが、現在は会員数6,482名（2002年12月3日現在）の大変大きな学会です。日本免疫学会の発展のためにこれまでご尽力を賜りました歴代の会長ならびに関係の諸先生方に心より敬意を表しますとともに、お礼を申し上げます。日本免疫学会のように大きな学会の運営が会長一人の意向で変わることは期待されませんが、任期中微力ながら全力を尽くしたいと思います。

会長の重要な役目は大きく二つあると思われます。第一は、会員の要望を的確かつ迅速に受けとめ、学会の運営に反映させるための組織整備をすることでしょう。前任の濱岡会長がルールを敷かれましたように、理事会と評議員会の役割を明確にし、免疫学会の方向を決める上で幅広く会員の声を反映させていく方向を更に推進することが必要と思われます。第二は、免疫学の学問的動向を会員各位が敏感に感じられるような学会運営を行うことでしょう。会員の皆様が最新の情報を相互に活発に交換できる場として、学術集会をより活性化し、アジア・オセアニア免疫学会連合（FIMSA）や米国免疫学会（AAI）の会員との交流をこれまで以上に拡げることにも必要になると考えられます。

近代免疫学の勃興期やその急速な進展を目の当たりにしてきました者の一人として、抗原特異性と多様性の発現機構、免疫多型性や免疫寛容の分子機構、免疫担当細胞の発生や器官形成のメカニズム、抗体のアイソタイプ変換や超変異発現機構が解明されてきていることに大きな感銘を受けています。近年、自然免疫制御の分子機構が急速に明らかになり、その活性化が獲得免疫の誘導に必須であることも分かってきました。また、自己免疫疾患や免疫不全症の病態解明、それに基づく新しい診断技術や治療法も開発されています。この流れの中で、会員諸氏が多大な貢献をしておられますことに大きな誇りを感じております。ゲノム研究の急速な進展とそれに続くポストゲノム研究、生命科学研究の大きな流れの中で、免疫システムの作動機構とその制御や異常に関する研究はこれまで以上に重要性が認識され、学際領域との研究連携が大きな意味を持つようになるでしょう。日本免疫学会はその中心母体として、会員相互の連携を強化するのみならず、免疫学領域の基盤研究支援の一層の充実、若手研究者の支援システムの確立、免疫学を目指す次世代の若手を育てるための教育など、新しい方向を模索していく必要があると思います。

私の就任に伴い、庶務担当幹事は烏山一教授（東京医科歯科大学）に、会計担当幹事は小安重夫教授（慶應義塾大学）をお願いしました。学会の運営につきまして若い会員の皆様から遠慮のないご意見とご提案を免疫学会事務局、理事、評議員、JSI Newsletter などを通じて、執行部にどしどしお寄せいただきますことを期待しております。どうか会員の皆様方のご指導とご支援を宜しくお願い申し上げます。

皆様の研究の益々の発展をお祈りします。